

月刊

2014

11
月号

みんぱく



特集

疫病

あらたな流行り病のきまぐれに応じる 西浦博
自然界から見る人獣共通感染症 伊藤公人
口蹄疫のパンデミック 野林厚志
アフリカ眠り病と「暗黒大陸」 見市雅俊
種痘により零落した疱瘡の神 寺岡茂樹

ねぼけた世界

長編の冒頭はいつも起き抜けに書く。正確にはふとんの上、完全に目ざめてもいないし眠ってもない、半睡状態の頭に、夢でも現実でもない、あたらしい世界が浮上する。からだのピントがようやく合い、風景が僕のなかに、わき水のようにこんこんとあふれ、あらゆるものを濡らし広がっていく。

小説のことは、起きているとき、日常で使われることばと、似ているように思えるけれど、成り立ちがまるでちがう。といって、夢と同じでもない。よくいわれることだが、ひとの夢くらい退屈な話はほかにない(例外はあるけれども)。

光と闇がうち寄せ合う、ちょうど中間の領域。波に転がされている貝殻や小石が、砂の上で、いつの間にか、幾何学模様、もしくは文字のかたちをなしている。汀に立ち、それを見おろして驚きもせず、淡々と「そこにそうあるもの」として書きとめる。冒頭部分はいつも、白いコピー用紙にうねうねと、4Bの鉛筆で書かれる。

ときどき小説が、現実のほうへ「はみだして行く」ときがある。声明のことを書いたその三日後に、声明の本場である、大原の寺を訪ねることになったり、衝突事故を書いた日の午後、自宅の

いしいしんじ

プロフィール
1966年大阪生まれ。作家、京都大学文学部卒業。
おもな著書に『麦ふみクーツエ』(新潮文庫)、坪田謙治文学賞受賞、『プラネタリアムのふたご』(講談社)、『みずうみ』(河出書房新社)、『ある二日』(新潮社、織田作之助賞受賞)など。Web上でもエッセイなどを連載。11月29日(土)の民博でのトークイベントにも出演予定。

外壁に、アクセルを踏み間違えた軽自動車があつこんできたり。小説は、常識ではとらえきれないことばで書かれているいっぽう、日常のことばを越えたひろがり、ふくらみ、大きさを持ち、僕たちの世界と響き合い、連関し合っている。

ふだん、銘柄や商品名を滅多に書かないのに、気がついたら登場人物が「ラッキーストライク」を吸っていた。珍しいな、とおもいつつ、ふと時計をみると、図書館の閉館時間が迫っている。バスに乗り、市街地に揺られていく。農協前でおりた老人が、ついきましたがたまで座っていた席の、赤いものをよくよくみたら、ラッキーストライクのねじれたパッケージだった。なるほど、とおもつて気がついたら、乗り過ぎしてしまっていた。おりてから、どこだろう、とまわりを見まわしていると、女の子がひとり歩いてきて、僕を指さし、ラッキーストライク! といった。果然と立ちつくしている、うしろから父親がやってきて、さあ行こう、と手をつなぎ、通りすぎ去っていった。うしろをふりかえつたら赤いネオン文字が輝いていた。「パチンコ ラッキーストライク」。現実は小説を書いてみないとわからないと思ふ。

月刊 みんなぱく

11月号日次

- | | |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
ねぼけた世界
いしいしんじ</p> <p>2 特集 疫病</p> <p>2 あらたな流行り病のきまぐれに応じる
西浦 博</p> <p>4 自然界から見る人獣共通感染症
伊藤 公人</p> <p>6 口蹄疫のパンデミック
野林 厚志</p> <p>7 アフリカ眠り病と「暗黒大陸」
見市 雅俊</p> <p>9 種痘により零落した疱瘡の神
寺岡 茂樹</p> <p>10 集めてみました世界の〇〇
お棺編
藤本 透子</p> <p>12 みんなぱく Information</p> | <p>14 文化遺産おもてうら
「アイヌ古式舞踊」の多様なかたち
齋藤 玲子</p> <p>16 多文化をあきなう
世界一美味しい胡椒をもう一度
倉田 浩伸</p> <p>18 味の根っこ
ミキガック
岸上 伸啓</p> <p>20 人間学のキーワード
スローフード
松嶋 健</p> <p>21 異聞逸聞
絵にさわる——“体”で感じるGF絵画の魅力
広瀬 浩二郎</p> <p>22 制服の世界、世界の制服
白くなくても「白衣」
大谷 かがり</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|

特集

疫病

人から人へ、あるいは動物から人へと感染する「疫病」。ときには爆発的に感染者を出し、多くの生命を奪うこともある。医療や衛生に加え、人の移動や社会情勢とも無関係ではない。そのような「疫病」と、人はどのようにつきあってきたのだろうか。



疫病よけの護符として用いられた版画
地域：ネパール 民族：チベット 標本番号 H0079126

あらたな 流行り病の きまぐれに应じる

西浦博

東京大学大学院准教授／
科学技術振興機構
戦略的創造研究推進事業CREST

行後に「職責を果たした」と胸を張って言えるまでグッスリ眠るわけにはいなくなる。

疫学は病気の拡がりを理解するための集団の科学である。歴史的に疫病の学問として発展した。あらたな疫病が流行したとき、疫学者は医療従事者らと一緒に真っ先に個別の感染者を訪問し、何の病気が流行中なのか分析する。まず、共通の身体症状などで症例を定義し、該当者のデータを収集する。患者データの分析により、病名と時間・空間スケールの感染者数拡大が把握される。例えば、二〇一四年夏のデング熱流行では、多くの感染者が代々木公園を訪れて蚊の咬傷を経験したことが即座に理解された。これは疫学調査の誇らしき成果であり、殺虫剤散布や公園封鎖の判断につながった。

リアルタイムのモデリングがはじまる

全容がわかれば、どれくらい感染しやすくて、



上：鳥インフルエンザの鳥サンプリング調査。タイ、ランブーン県にて
下：デング熱対策のため殺虫剤をまいているところ。ベトナム、ホーチミンにて

ある日、突然に発生する
自然災害と同様、あらたな感染症の発生は予期せぬときにやってくる。ある日、突然に集団感染がメディア等で報告され、わたしたちが無意識に日常として主観的にとらえている以上の感染者数が確認され、やっと専門家は流行を認識する。その「きたつー」という脳内の仕事モードへの切り替えのときは、わたしたち疫学者が数か月の睡眠不足を覚悟する瞬間でもある。流

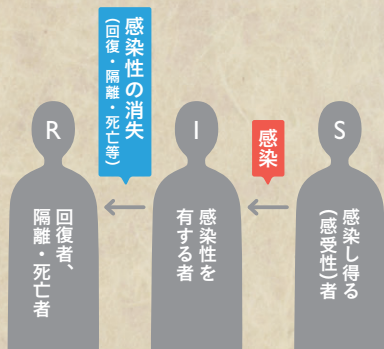
死亡しやすいのか、素早く正確に定量化することを求められる。理路整然とした計算過程のもと、データ分析を通じて流行特性と最適な流行対策を明らかにしなければならぬ。代々木公園のような一か所での感染は極めて稀であり、他の例では、何の対策を打てば効果的なのか不明でない。

一人の感染者が生み出す二次感染者数の平均値を基本再生産数（R0）とよぶ。R0が一未満であれば感染者数は次第に減衰し、流行は起こらない。一方、R0が一以上ならばパンデミックが起こる可能性はゼロでない。眼前の集団感染が大規模流行に発展するかどうかは、R0の閾値の問題に置き換えられる。同分析は流行開始数か月で実施するよう期待される。

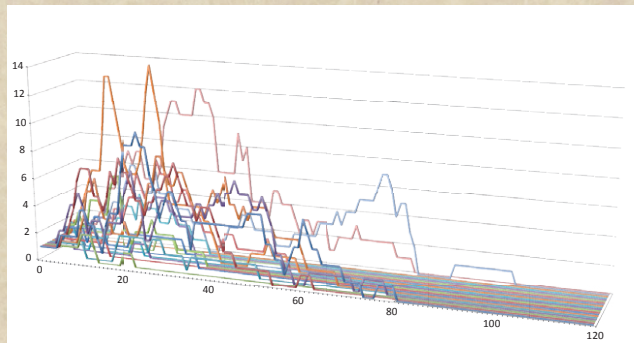
流行中の観察データは全感染者の一部しかとらえていない。この不完全な観察情報を可能な限りに活用して、流行をコンピュータ内で再現し、流行状況がリアルタイムで把握される。ただし、小規模流行は感染者数が少ないために感染リスクの確率性が高く、接触行動は集団内で均質ではない。いつも、妥協可能なギリギリの妥当性を求めて推定と予測がおこなわれる。

悩ましき社会とのかかわり

疫学は単なる理系の科学でない。エボラ流行では、地域封鎖によって社会に混乱が生じ、映画のようなギャングによる病院襲撃が起こった。差別対象になることを恐れ、感染者は病院から逃亡し、逃亡先の地域に流行を引き起こした。病院には十分な医療資材や食糧が届かず、感



感染症流行のシミュレーション模式図
感染症の流行シミュレーションでは対象人口を上記のような感染状態に依存したコンパートメントにわけて考える。感受性を有する者が感染して2次感染を起こし得る者になってから回復・死亡するプロセスを数式で記述し、その時間発展をグラフで書くと左のような流行曲線が得られる



東京のデング熱流行シミュレーション
横軸は日付で0日目は7月15日をあらわす。縦軸は新規感染者。シミュレーションによって流行規模や感染者数がまったく異なることがわかる。東京ではこれらのうちのひとつが結果として観察された、と解釈される

染防御用の十分な資材がない病院では医療従事者がストライキを起こした。あらたな医療従事者は感染を恐れて流行地に赴かず、慢性的に治療者が不足した。

感染症流行は、理系の科学に基づく最適流行対策だけで対峙できるものではない。中国五世紀の医方書『小品方』に「上医は国を治し、中医は民を治し、下医は病を治す」という格言がある。わたしが臨床医でなく、疫学者を志す際に感銘を受けたことばだ。しかし、理論に傾倒した研究内容ばかりではエボラ流行を治せない。さまざまな視点をもつ者が協力して疫病に対峙しなければ問題解決に至ることはできない。

自然界から見る 人獣共通感染症

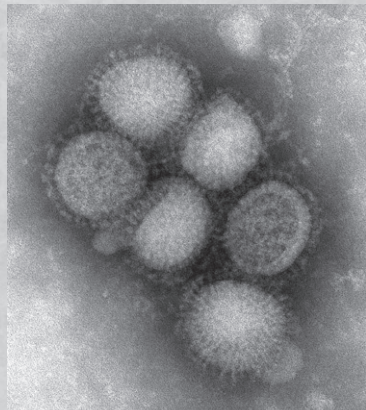
伊藤 公人

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター教授
科学技術振興機構
戦略的創造研究推進事業CREST

人獣共通感染症

インフルエンザウイルス、エボラウイルス、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）ウイルス、狂犬病ウイルス、結核菌、炭疽菌、エキノコックスなど、人と動物の両方に感染する微生物により引き起こされる疫病を人獣共通感染症という。

感染とは、微生物がより大きな生物の体内に侵入し、その生物が生存するためのしくみを利用して増殖することである。感染



インフルエンザウイルスの電子顕微鏡写真
(撮影・アメリカ疾病予防管理センター)

される側の生物を宿主という。感染症、つまり、疫病は、微生物が感染することによって起こる宿主の病気である。
野生動物、家畜、家禽に感染していた微生物が、種の壁を超えて人に感染することにより、人獣共通感染症が起こる。

自然宿主と共生する微生物

感染微生物の増殖は、宿主の生命活動に依存する。子孫を残すためには十分な数の宿主が必要である。宿主を死に至らしめることは、感染した微生物にとって不利益であるはずである。

人獣共通感染症を引き起こす微生物には、その微生物が感染しても重篤な症状を示さない特別な動物が存在する。この動物を自然宿主という。太古の昔から、微生物は自然宿主に、自然宿主は微生物にそれぞれ適応するように進化してきた。微生物と自然宿主は、微生物が感染しても宿主が病気になることはない、共生に近い関係を築いて



インフルエンザウイルスの自然宿主であるカモ (2014年10月北海道大学にて撮影)

いる。

我々人の腸内には、数百種類の細菌が共生している。腸内細菌は大腸で食物繊維を分解し、人がエネルギーを吸収できるように働く。ウイルス感染が宿主に有益に働く例も少なくはない。哺乳動物の妊娠では、母親の胎盤に栄養膜合胞体層という細胞の融合体が形成され、母親と胎児をつないで栄養を受け渡す。この過程に必須であるシンシチンというタンパク質は、哺乳類の祖先に感染したレトロウイルスに由来する。また、山中伸弥教授らは、人の遺伝子に組み込まれた別のレトロウイルスの遺伝子が、iPS細胞の樹立メカニズムに関与することを突き止めている。

生物種を超えて感染する微生物

自然宿主と共生している微生物が、種の壁を乗り越え、人に馴化すると人獣共通感染症が発生する。

インフルエンザウイルスは、野生のカモを自然宿主とする。人を含む哺乳動物と他の鳥にも感染し、有史以来、人や家畜・家禽に甚大な被害を与えてきた。カモがインフルエンザウイルスに感染しても重篤な症状を示さない。インフルエンザのパンデミックは、野生水禽のウイルスが家禽と家畜での流行を経て人に感染し、人の集団で効率的に増殖して引き起こされる。二〇〇九年



エボラ出血熱感染予防用ポスター。
2014年8月20日ガーナ、カデにて (撮影・浜田明範)

には、ブタのウイルスに由来する遺伝子を持ったH1N1ウイルスが人の集団に侵入し、南北アメリカ大陸から流行が始まり、瞬く間に世界的に大流行した。

現在、西アフリカで、エボラウイルスによる感染症が発生し、人から人へと感染を繰り返し、重大な事態に発展している。一九七六年ザイールでの最初の発生以来、エボラ出血熱はアフリカ中部の国々で突発的に発生・流行を繰り返してきた。エボラウイルスの自然宿主はフルーツコウモリであると考えられている。国際社会は、総力

をあげて現在の感染を収束させると同時に、同様の事態が再び発生しないよう、このウイルスが自然宿主から人に伝播する経路を早急に解明する必要がある。

人獣共通感染症は自然界に由来する微生物によって引き起こされるため、根絶できない。自然界にいる微生物を調査し、人で感染症を起こすリスクを評価することが重要である。人獣共通感染症を克服するためには、人類が次に取るべき対策を準備し、自然を相手に戦略的に対峙しなければならない。

口蹄疫のパンデミック

野林厚志のぼしあつし

民博文化資源研究センター

日本では買えない台湾産の豚肉
夕食の買物をしていると輸入食品、とりわけ食肉の輸入元の国が限られていることに気づく。例えば、豚肉ならば、カナダ、アメリカ産はよく見かけるし、イベリコブタと称したスペイン産のパッケージも店頭にならぶ。それが、二〇年前の肉屋には台湾産の豚肉がならべられていた。今、日本で台湾産の豚肉が売られていないのは、一九九七年の台湾での口蹄疫のパンデミックが原因である。台湾でブタの口蹄疫が報告されたのはじつに六八年ぶりで、被害総額は当時の金額にして四〇五億円、失業者は六万五〇〇〇人にものぼり、口蹄疫による二〇世紀の世界最大の被害といわれた。

日本獣医学会の報告によれば、このときの口蹄疫は外から持ち込まれたものとされている。旧正月用に大量のブタの臓器や子豚が中国、香港等から密輸入され、これらの残滓を含む厨芥が中南部地域の養豚に用いられ、口蹄疫が発生したというのである。発生が確認された後も、業界や消費者の反発があり、豚肉の市場閉鎖、家畜、人間、車両の移動の禁止といった措置がすぐには

とられず、口蹄疫は一月もたたずに台湾中に広がった。家畜の殺処分のみでは対処しきれないと判断した台湾政府はワクチン接種をおこない、パンデミックを終息させた。日本はワクチンを使用しないで口蹄疫をおさえるワクチン非接種清浄国であり、ワクチン接種清浄国からは食肉を輸入しない。台湾にとって最大の得意先であった日本へ豚肉の輸出ができなくなり、台湾の養豚業は大きなダメージを受けた。

社会的産物としてのパンデミック
じつは筆者はまさにパンデミックが起きたときに台湾に滞在していた。当時は口蹄疫についての知識はほとんどなく、ブタがとんでもないことになっているようすをテレビで対岸の火事を見るようになっていた。前日まで豚肉を売っていた市場に誰もいなくなったのを見て、しょうがないから鶏肉を買おうなどと暢気にかまえていた。そんな筆者が再び口蹄疫に出くわしたのが、二〇〇一年のイギリスにおけるパンデミックである。イギリスは少し郊外に出ると、道路の両側に牧場が広がり、ヒッジが草を



イギリス南部の田園風景。2010年(撮影・山中由里子)

食んでいる光景を楽しむことができる。しかしながら、二〇〇一年はそうした光景は失われ、道路の脇に死んだヒッジが横たわっていたこともあった。牧場や動物園は閉鎖となり、動物と人間が接触する機会が制限されていった。

イギリスの口蹄疫の拡大の原因が調査された結果は興味深い。口蹄疫はまずは近隣伝播 (Local spread) といわれる三キロメートル以内の狭い地域内での家畜の接触感染、機材、道路などを介した感染が最初におこり、それらの農場からさらに二次感染が起こり、広範囲に感染が拡大していく。この年のイギリスの口蹄疫のパンデミックは感染が摘発される前に、感染羊が市場に

運ばれ、他の個体と接触して起こったと考えられている。もちろんヒッジは自ら市場に出かけたのではなく、人間が取引のために運搬したのである。
日本でも口蹄疫の発生がしばしば報告される。患者は残念ながら殺処分され、ワクチン接種を回避しながら全国的なパンデミックにならないように努力が重ねられる。それでも、地域の畜産は壊滅的なダメージを受ける。家畜が隣の農場にまで歩いていくわけではないのに近隣伝播が繰り返されるからである。そこには日常的な人間同士のやりとりが存在している。獣医学の専門家をはじめ、地域社会の人間関係も感染の広がりを把握する重要な情報だと口にする。家畜の感染症のパンデミックは人間の社会的産物という側面も持ち合わせているのである。



2001年、イギリスで口蹄疫のパンデミックが起きた際、車道には自動車のタイヤを消毒するためのエリアがもうけられた

アフリカ 眠り病と 「暗黒大陸」

見市雅俊みいち まさとし

中央大学教授

感染症と植民地

アフリカでは、いま注目を集めているエボラ出血熱をはじめ、さまざまな感染症が跋扈しているが、二〇世紀前半の植民地時代には、アフリカ眠り病が最大の関心を集めていた。トリパノソーマという原虫が吸血性のツェツェ蠅を媒介してヒトと家畜の体内に侵入して発症する病気である。

一九世紀後半以降、西洋列強による「暗黒大陸」の本格的な植民地化が進行し、アフリカは非常に不安定な状態に陥った。ツェツェ蠅とアフリカ人社会との、散発的な病気の発生をともなうものの、相対的に安定していた「棲み分け」状態が、植民政策による大規模なヒトの移動などによって攪乱され、ヒトの眠り病は、かつてない規模で大流行するようになったのである。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、ベルギー領コンゴではおよそ五〇万人が、またイギリス保護領ウガンダではおよそ三〇万人前後がこの病気のために死んだ、と推定される。その後、ヒトの眠り病の流行はおさまったようにみえたが、二〇世紀末以降の政治的混乱のなかで、患者数は増加に転じた。図1は患者数を国別にみ

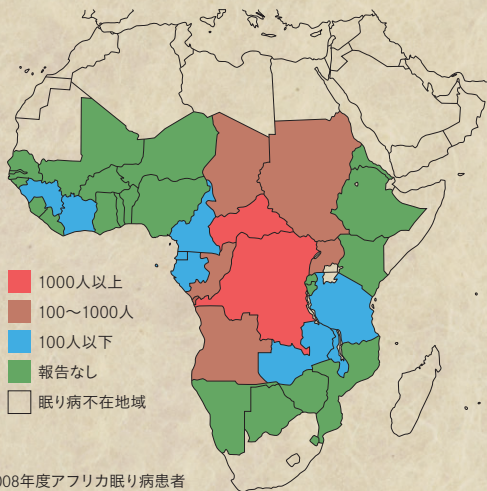


図1 2008年度アフリカ眠り病患者 (WHO/Regional Office for Africa http://www.who.int/profiles_information)

たもの。そして、表にみられるように、現時点ではヒトの眠り病は沈静化の傾向にあり、二〇〇九年の段階では患者数が七〇〇〇人強にまで減少している。しかし、予断は許されない。感染症の流行は、人間社会の動向と深く結びついているからだ。いっぽう、図2からうかがえるように、ツエツエ蠅の存在が、アフリカ大陸における牛の飼育地域を限定しているとされ、その撲滅は、経済開発のための重要な課題としても位置づけられることになった。

じつさい、植民地時代から、さまざまなツエツエ蠅対策が講じられてきた。第二次世界大戦後に限定してみても、DDTの大量散布、ツエツエ蠅捕獲作戦、さらに、原子力の「平和利用」の一環として位置づけられ、アメリカが積極的に関与したツエツエ蠅不妊計画などが実行されてきたが、いずれも満足のゆく結果

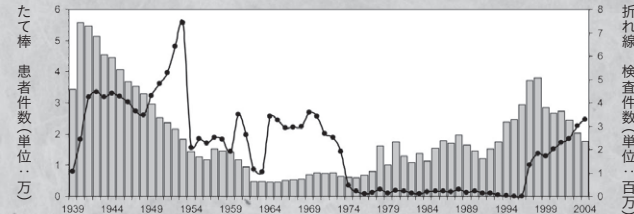


表 アフリカ眠り病の患者数 (D. Steverding, "The History of African Trypanosomiasis". Parasites and Vectors, 1:3 2008, p.6.より)

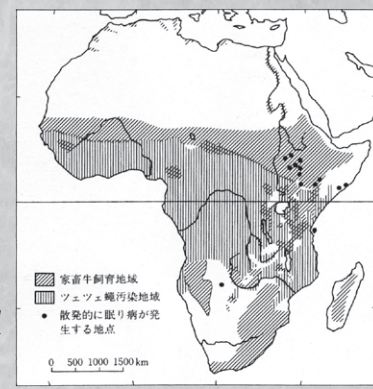


図2 現代アフリカにおけるツエツエ蠅と家畜牛の分布図 (H.S. Janke, Tsetse Flies and Livestock Development in East Africa, Weltforum Verlag 1976, p.14.より)

は得られていない。また、医薬品についてもこれまでのところ「特效薬」は見つかっていないが、北澤氏(東京大学)による、抗生物質アスコフランの実用化のころみに大きな期待が寄せられている。

「暗黒大陸」時代はいつか

植民地時代から今日まで一貫して先進国側が主導してきたツエツエ蠅対策にかんしては、アフリカ人社会の「文脈」を重視する立場からの批判がある。それによれば、アフリカでは、じつは古来よりツエツエ蠅対策が営々となされてきたのだ。すなわち、農業開発によって、ツエツエ蠅の主たる棲息地である灌木地帯を破壊し、その分だけツエツエ蠅のテリトリーが狭められてきた。その「内的」開発が植民地化によって途絶し、さらに、「外的」開発が押しつけられることによって事態は悪化したのである。この議論に対しては、「時計の針を巻き戻す」ことはできないとの現実主義的な反論がある。いずれにせよ、アフリカが「暗黒大陸」となったのは植民地時代だったことを見落とさないようにしよう。

種痘により零落した 疱瘡の神

寺岡 茂樹

中世日本研究所女性仏教文化史研究センター 研究員

お役だった天然痘

日本において、天然痘は「疱瘡」ともいわれる。この病気は、ウイルスに起因する伝染病であり、感染力が非常に高く、飛沫や接触により急速に感染が拡大する。潜伏期は約二週間前後で、感染時には悪寒発熱を伴い、全身に発疹が出て濃疱に変化する。幸い治癒したとしても、全身に痘痕を残し、失明することもある。特に幼い子どもを持つ親には恐れられた病気である。

インドが起源とされる天然痘は、シルクロードを通り、仏教とともに日本に伝わったとされる。そして、奈良時代以降、三〇年周期で流行を繰り返していたが、江戸時代になると、大阪・京都・江戸といった大都市では連年常時蔓延するまでになっていた。そのため当時の天然痘は、誰しもが避けることができない「お役」とされ、特に子どもにとって、死をもたらすこの病気からの回復は、死と再生を体験する節目として、通過儀礼的色彩を含んでいた。

祀られる疫病神

江戸時代、流行病に対して有効な治療法はなかった。ひとたび病気が流行すると、病いに

かからぬように、家の戸口にまじないを施したり、疫病神が退散するのを願ったりしていた。こうした人びとの願いは、さまざまな疫病神信仰や医療風俗などといったものを誕生させたのである。

江戸時代、天然痘は、「疱瘡神」という疫病神がもたらすと信じられていた。しかし、疱瘡神は疱瘡をもたらす疫病神であるが、迎えて饗宴すれば庇護を与え、疱瘡から護ってくれるとされた。そのため、家族に感染者がでると、この神を神棚に祀り、早期回復を願い、回復後は神棚を四つ辻や川に流し送りだす儀礼をおこなっていたのである。

江戸時代の浮世絵や絵草紙には疱瘡神は天然痘を治す神として登場することがある。こういった病気の神の福神化は、他の病気の神にはみられない意識であり、こうした観念のあらわれは、天然痘が子どもも通過儀礼的病気であるという独特な病観に起因しているからだとはいえる。

逃げ行く疱瘡神

イギリスでジェンナーが、牛痘種痘法を発見したのは一七九六年。日本では、その半世紀後



ベルギー領コンゴで眠り病調査に従事するフランス医師団 1907年5月25日のThe Illustrated London News

疱瘡神 中村幸彦編「編木三八疱瘡除け」『赤本黒本青本集』大東急記念文庫善本叢刊第4巻 (大東急記念文庫蔵)



牛痘接種引札(内藤記念くすり博物館蔵) 資料番号: Z24050

の一八四九年に、長崎で初めて種痘が成功し、その後、牛痘種痘法を推奨する目的で「牛痘接種引札」が日本各地の種痘所から出版される。その引札には、「疱瘡の神とハ誰か名付けん、悪魔外道のたゝりなすもの」という詞書とともに、牛痘児(種痘の神)が白牛(牛痘接種の種をとった雌牛)に乗り、疱瘡神を退治するようすが描かれている。

牛痘種痘法の伝来以降、天然痘は予防できる病気となり、恐れる必要のない病気となっていく。しかし、それは同時に、当時の民衆が疱瘡神に対して抱いていたイメージを変容させるきっかけへとつながっていったのである。

そして、種痘の登場により、天然痘を治す神であった疱瘡神は零落し、やがて天然痘の撲滅とともに姿を消していくのであった。

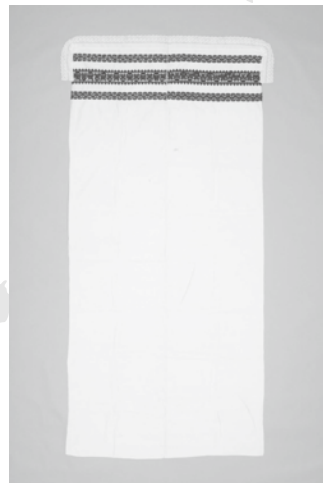
集めてみました世界の



ふじもととうこ
藤本 透子 民博 民族文化研究部

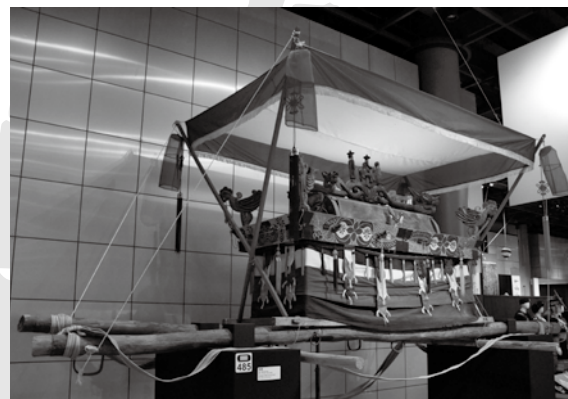
生の最後に経験する死出の旅とはどのようなものなのだろう。
——その旅への想像力を映し出すもののひとつにお棺がある。死者を葬送するかたちは、火葬や土葬などさまざまで、それにもなってお棺の形も変化する。一部のイスラーム地域で布にくるんで土葬するように、お棺があまり必要とされない場合もある。また、日本でこの百年あまりのあいだに座棺から寝棺へ、土葬から火葬へと変化したように、葬送やお棺の形態には時代による変化も意外に大きい。

※寸法の単位はセンチメートルです。



韓国

喪輿（サンヨ）とよばれるこの色鮮やかな輿（こし）は、土葬するとき家から墓地まで遺体を運ぶために用いられた。本館展示「朝鮮半島の文化」にて展示中。
H200 x W555 x D225
H0214826



ハンガリー

葬儀の際に棺に掛けられる布。白い布に赤い糸で刺繍（ししゅう）が施されている。忌中用の窓覆いや鏡覆い、テーブルクロスとセットで用いられる。
W281 x L141
H0161390

中国

（広西チワン族自治区）
二次葬送用の壺。重厚な質感の茶色い大きな壺で、埋葬後3～5年してからとり出し洗ったお骨を入れてお墓に安置する。
H60 x W33 x D32
H0237500



日本（沖縄県）

ジーサーミ（厨子甕）とよばれるこの骨壺は陶製で、死者を葬送して数年後に洗骨する際に用いられる。屋根にあたる部分には獅子（しし）や龍が配置されている。
H80 x W46 x D32
H0003062



日本（大阪府）

座棺の置台。明治時代に使われていたものと推定される。黒と赤の漆塗りで、蓮華（れんげ）の花弁には淡い金色の輝きが残る。
H27 x W70 x D71
H0117551

日本

霊柩車（れいきゅうしゃ）は、大正時代に葬列の衰退とともに登場した。昭和38年に製作されたこの黒檀（こくたん）製の宮型には、全面に唐草模様が彫刻され、一部に銀色の金具がとり付けられている。
H310 x W182 x D450
H0207317



インドネシア

トバ・バタック族の盛大な葬儀の踊りの輪の中心に置かれる棺。赤と白と黒、そして死と関連しているといわれる黄色で、大きな目をした人の顔のような文様が彫られている。
H50 x W210 x D50
H0004255



ガーナ

ピンと張ったひげ、高くもち上げられた尻尾、堂々としたたてがみ——この棺は狩人だった故人を偲んで作られた。特別展「イメージの力」で公開中。
H140 x L259 x W73
H0231425



オーストラリア

葬送儀礼の最後に制作され、死者の母方親族が保存していた骨を大地に返す棺。丸太をくりぬいて作られ、表面には死者の一族内で伝えられてきた模様が描かれる。特別展「イメージの力」にて公開中。
H305 x W26 x D32
H0085788



タイトル部のお棺：
ドイツの棺のミニチュア（H0228147）

特別展

国立民族学博物館創設40周年記念
日本文化人類学会50周年記念

「イメージの力」

国立民族学博物館「コレクションにさぐる」人間の作り出したイメージのはたらきや受けとめられ方に、人類共通の普遍性はあるのでしょうか。観覧者とともにさぐります。
会期 12月9日(火)まで
会場 特別展示館

■関連イベント

トークイベント

会場となる「イメージの力」展の空気を取り込んで、即興で小説を生み出します。
日時 11月29日(土)13時30分～15時
ゲスト いししいしんじ(小説家)
聞き手 山中由里子(本館准教授)

会場 特別展示館
※申込不要、先着順、要特別展示観覧券

ワークショップ

「体感!イメージの力」本展をつくりだした研究者とチームを組み、展示資料を活用しながら感じたことを語り合います。
日程 11月22日(土)、23日(日)・祝
時間 13時～16時30分(12時30分受付開始)
会場 特別展示館(定員各回16名)

「未知なる大地」

グリーンランドの自然、そこに住むイヌイットの人びとの歴史と文化を紹介します。
会期 11月18日(火)まで
会場 本館企画展示場

講師 長屋光枝(国立新美術館 主任研究員)
吉田憲司(本館 教授)

対象 本展実行委員ほか3名
22日(土)一般(中学生以上)、
23日(日)・祝 小学4年生～6年生
※要事前申込、先着順、
参加費500円(別途要特別展示観覧券)

ギャラリートーク
日程 11月6日(木)、10日(月)、13日(木)、
17日(月)、20日(木)
時間 17時～11時30分
※申込不要、参加無料(要特別展示観覧券)

みんなくナレッジキャピタル
「イメージの力」をさぐる
大阪・梅田のナレッジキャピタルで特別展と連動した連続講座を開催します。(全6回)
時間 19時～20時30分
会場 グランフロント大阪北館1F
ナレッジキャピタル The Lab Cafe Lab
※要事前申込 参加費500円(ドリンク代)、定員各回50名
主催 一般社団法人ナレッジキャピタル
国立民族学博物館

11月12日(水)
講師 齋藤玲子(本館 助教)
話題 イメージと商品化

11月26日(水)
講師 上羽陽子(本館 准教授)
話題 色と光が放つイメージ

企画展
「未知なる大地」
グリーンランドの自然、そこに住むイヌイットの人びとの歴史と文化を紹介します。
会期 11月18日(火)まで
会場 本館企画展示場

■関連イベント
ギャラリートーク
日程 11月6日(木)、10日(月)、18日(火)
時間 14時～14時30分
講師 岸上伸啓(本館 教授)

公開放演会
「文化遺産の人類学」
文化遺産を支えるさまざまな動きを見つめてきた文化人類学者が、文化遺産の知られざる一面を報告します。
日時 11月8日(土)10時15分～16時50分(開場10時)
会場 本館第5セミナー室(定員75名)
※参加無料、要事前申込
お問い合わせ・お申し込み heritage@dc.minpaku.ac.jp

みんなくワールドシネマ
「海と大陸」
アフリカの不法移民をかくまうイタリアの島の一家の苦闘を通して、移民問題を考えます。
日時 11月9日(日)13時30分～16時(開場13時)
会場 本館講堂(定員450名)
※申込不要、先着順、参加無料(要展示観覧券)
※当日11時30分から展示場ミレクチャーあり。

北大阪ミュージアムメッセ
北大阪7市3町の美術館、博物館が2日間みんなくに大集結し、楽器演奏によるコンサート、地域の民俗芸能上演などを実施します。
日程 11月15日(土)、16日(日)
会場 本館エントランスホール及び特別展示館休憩所(BF)
※申込不要、参加無料
主催 北大阪ミュージアムネットワーク

カムイノミ神への祈り
本館に収蔵されているアイヌの標本資料への感謝と安全を願い、北海道アイヌ協会の協力を
11月19日(水)
講師 宇田川妙子(本館 准教授)
話題 地域社会になつくイタリアの食

11月26日(水)
講師 杉本良男(本館 教授)
話題 インド・サリイの世界

11月19日(水)
講師 西尾哲夫(本館 教授)
話題 イスラームの世界観

11月12日(水)
講師 西尾哲夫(本館 教授)
話題 アラビアンナイトから考える

をえて、カムイノミをおこないます。
日時 11月27日(木)10時30分～11時50分
会場 本館玄関前広場
※雨天の場合は、特別展示館休憩所(BF)にて開催、一般見学可能

公開放演会
「無形文化遺産 選ぶ視点 選ばれる現実」
ユネスコ無形文化遺産として和食が認定されるなど、いま注目されている無形文化遺産の過去・現在・未来について紹介します。
日時 11月4日(火)18時30分～20時40分
会場 日経ホール(東京、定員600名)
主催 日本経済新聞社
※要事前申込、参加無料
お問い合わせ 研究協力係 06・6878・8209

みんなく創設40周年記念 カレッシンアター
「みんなくの地球探究紀行」
10月からプログラムをさらに充実、参加しやすいスタイルで後期講座がスタートしました。
時間 13時～14時30分
会場 あへのハルカス近鉄本館「スペース9」
※要事前申込(申込締切は各回開催日の1週間前)、参加費各回10000円
主催 産経新聞社

11月12日(水)
講師 西尾哲夫(本館 教授)
話題 イスラームの世界観

11月19日(水)
講師 宇田川妙子(本館 准教授)
話題 地域社会になつくイタリアの食

11月26日(水)
講師 杉本良男(本館 教授)
話題 インド・サリイの世界

11月12日(水)
講師 西尾哲夫(本館 教授)
話題 アラビアンナイトから考える

11月19日(水)
講師 宇田川妙子(本館 准教授)
話題 地域社会になつくイタリアの食

11月26日(水)
講師 杉本良男(本館 教授)
話題 インド・サリイの世界

11月12日(水)
講師 西尾哲夫(本館 教授)
話題 イスラームの世界観

11月19日(水)
講師 宇田川妙子(本館 准教授)
話題 地域社会になつくイタリアの食

11月26日(水)
講師 杉本良男(本館 教授)
話題 インド・サリイの世界

11月12日(水)
講師 西尾哲夫(本館 教授)
話題 イスラームの世界観

11月19日(水)
講師 宇田川妙子(本館 准教授)
話題 地域社会になつくイタリアの食

11月26日(水)
講師 杉本良男(本館 教授)
話題 インド・サリイの世界

11月12日(水)
講師 西尾哲夫(本館 教授)
話題 イスラームの世界観

※国立民族学博物館ミュージアム・ショップの記事は、表紙うらに移りました。



(国)にて展「カワ・トゥギトウ」の椅子「イメージの力」展にて
つきの椅子「カワ・トゥギトウ」の椅子「イメージの力」展にて
神立撮影 上野則宏

みんなくセミナー

時間 13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は観覧料が必要です)
第438回 11月15日(土)

【特別展関連】美術館からみたみんなくコレクション
講師 長屋光枝(国立新美術館 主任研究員)
山田由佳子(国立新美術館 研究員)
齋藤玲子(本館 助教)
司会 上羽陽子(本館 准教授)

2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催されました。新美術館とみんなくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返ります。異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しします。

2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催されました。新美術館とみんなくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返ります。異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しします。

2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催されました。新美術館とみんなくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返ります。異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しします。

2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催されました。新美術館とみんなくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返ります。異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しします。

2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催されました。新美術館とみんなくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返ります。異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しします。

2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催されました。新美術館とみんなくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返ります。異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しします。

2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催されました。新美術館とみんなくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返ります。異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しします。

2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催されました。新美術館とみんなくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返ります。異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しします。

2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催されました。新美術館とみんなくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返ります。異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しします。

2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催されました。新美術館とみんなくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返ります。異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しします。

2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催されました。新美術館とみんなくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返ります。異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しします。

刊行物紹介

■岸上伸啓 著
『極北の風景 グリーンランド 写真帳—ヌーク編—』
風土デザイン研究所 1,500円(税別)

■広瀬浩二郎 著
『世界をさわる —新たな身体知の探究—』
文理閣 2,000円(税別)

北大西洋に浮かぶ世界最大の島、グリーンランドの総人口は約5万7千人でそのうちの9割がイヌイットです。現代のグリーンランドの様子を、首都ヌークで2008年と2013年に撮影した写真と解説で紹介しています。

サイエンス、アート、コミュニケーションの三つの切り口から“さわる”世界に多角的にアプローチします。天文学・古生物学・赤チャルン学の研究者、武道家、彫刻家の協力を得て、ユニークな触文化論を展開しています。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員証提示)
第437回 12月6日(土)14時～15時
第438回 2015年1月10日(土)14時～15時

ナラ林文化を再考する
講師 佐々木史郎(本館 教授)

大陸アジアの照葉樹林帯に、日本文化の起源を求めた照葉樹林文化論。この学説の一翼を担った佐々木高明元館長は、南北双方からルーツを探る必要性を併せて指摘し、照葉樹林文化に对应するものとして、北方系の文化の流れに「ナラ林文化」という仮説の枠組みを設定しました。本講演では、ナラ林文化論に託された課題を抽出し、生態環境や歴史の変遷をふまえて、「ナラ林文化」という文化領域設定の可能性を改めて問い直してみたいと思います。

グローバル時代の「知的生産の技術」
——フォーラム型博物館の可能性——
講師 久保正敏(本館 教授)

梅棹忠夫初代館長は、博物館を博物館と位置づけ、モノ、映像や音響資料の収集とそれらの情報化に力を注ぎました。また、利用者自らが情報を選択・再構築し、自ら「知的生産」を実践する場として、民博が活用されることを期待しました。グローバルな情報収集と利用が日常となった現代は、博物館における資料や情報の集積・利用や公開の手法において、多様な異文化への配慮が特に必要です。「フォーラム型」の情報集積と公開に新たな可能性を見出す、これからの「知的生産の技術」について考えます。

※いずれの講演会も終了後に講師をまじえ、1時間程度の懇談会をおこないます。

第85回民族学研修の旅
手仕事への回帰
——カンボジア、東北タイの機織りの現場をめぐる——
2015年2月1日(日)～2月9日(月)
訪問先…カンボジア、タイ東北部

「アイヌ古式舞踊」の 多様なかたち

さいとう れいこ
齋藤 玲子 民博 民族文化研究部

舞踊をはじめとする芸能が文化遺産として公的認定を受けると、上演の機会やプロの担い手が増える。日本のユネスコ無形文化遺産でも、そうした「舞台化」をめぐる議論がおこなわれている。

複数の指定団体と多様な活動

「アイヌ古式舞踊」は、一九八四年に国の重要無形民俗文化財に指定された。そして二〇〇八年には「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」への日本の第一回提案としてユネスコ事務局に提出されて、翌二〇〇九年に記載された。国の文化財に最初に指定されたのは、春採と阿寒（現在はいずれも釧路市）、帯広、浦河、静内、平取、白老、近文（旭川市にある八つの団体だったが、ほかの地域でも踊りの復興に力を注ぎ、一九九四年には

九つの団体が追加され、現在は一七団体となっている。アイヌの踊りは、おもに祭祀のときに演じられ、カムイ（神・靈魂）に訴えかけるものから、杵つきなどの作業歌舞、動物の動きを模した踊りや、娯楽的・即興的なものまで多様である。踊りは歌をとめない、歌詞は比較的短く、決まり文句や掛け声、動物の鳴き声などの組み合わせが繰り返される。樺太や古い記録では北海道にも楽器の伴奏があったが、手拍子のほかは声だけで踊る、といった共通点をも

つ。いっぽう、地域によって伝承されている演目には違いがあり、同じ演目でも内容が異なることがある。「アイヌ古式舞踊」は、そもそも多様なものを含むゆるやかなくりといえる。また、指定されている団体以外にも、各地に踊りをふくむアイヌ文化の伝承活動をしている団体がある。道外に住む人たちのグループや、地域をこえて活動をする若手の集団もある。こうしたグループのなかには、古い写真や音声記録などから現代に伝承されていない踊りの復元を

国の重要無形民俗文化財の指定を受けた古式舞踊保存会

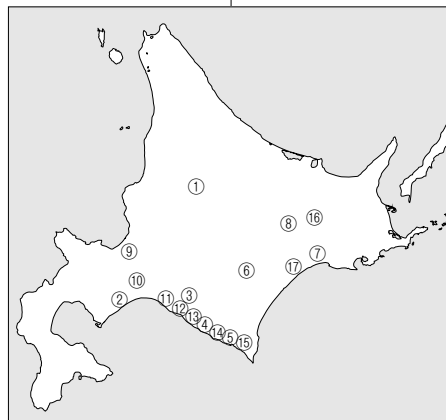
【1984年指定】

- ①旭川チカップニ アイヌ民族文化保存会
- ②白老民族芸能保存会
- ③平取アイヌ文化保存会
- ④静内民族文化保存会
- ⑤浦河ウタリ文化保存会
- ⑥帯広カムイトウウボボ保存会
- ⑦春採アイヌ古式舞踊釧路リムセ保存会
- ⑧阿寒アイヌ民族文化保存会

【1994年指定】

- ⑨札幌ウボボ保存会
- ⑩千歳アイヌ文化伝承保存会
- ⑪鶴川アイヌ文化伝承保存会
- ⑫門別ウタリ文化保存会
- ⑬新冠民族文化保存会
- ⑭三石民族文化保存会
- ⑮様似民族文化保存会
- ⑯弟子屈町屈斜路古丹アイヌ文化保存会
- ⑰白糠アイヌ文化保存会

北海道立アイヌ民族文化研究センター編 2001『ボン カンピソシ』7「芸能」をもとに作成



試みる人たちもいれば、さまざまに楽器を用いて新しいアレンジで踊りを創造する人たちもいる。

継承のかたち

演目のほかに異なるのは、その継承の方法である。もともとは地元でおこなわれる初漁・収穫の祭や、先祖供養や結婚式などの宴の際に踊られ、子どもたちから自然に身につけたのだろう。しかしいまはそうした祭祀や儀式が減り、多くの保存会では定期・不定期に「練習」をおこない、踊りを「披露」する機会に備えている。文化財の指

定以前から他地域の祭などで踊ることはあったが、一九八九年に始まった北海道アイヌ協会主催の「アイヌ民族文化祭」や、一九九七年に施行された「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」以降は、全国各地でおこなわれる「アイヌ文化フェスティバル」や芸能祭などで踊ることが急増した。

それにとめない、観客を前にして舞台で踊るという状況が増えていった。各地で民族芸能の「舞台化」が問題視されてきたが、アイヌの踊りも同じ課題

に直面している。阿寒アイヌ協会が主催する「カムイノミ」をとおして、一般の参加者も輪に入って踊る



みんなのカムイノミで、一般の参加者も輪に入って踊る



国際研究大会のパンケットのステージで弓の舞を披露する阿寒アイヌ工芸協同組合の踊り手

定以前から観光客向けに踊りを演じてきたところでは、舞台での踊りに慣れていく人が多く、見せる演出もおこなわれてきたが、そうではない大部分の地域でも、舞台映えを考えねばならなくなってきたのである。

アイヌ文化を 紹介する立場から

こうした事情を頭ではわかっていたにもかかわらず、筆者は数年前、とあるイベントでステージにあがった保存会の人たちの、踊りはさておき、演目紹介の語りや次の演目に移る際の動きのぎこちなさなどが気になってしまった。前後に歌や踊りを披露した、プロとして活動しているユニットや若手グループの演技とどこかで比べてしまっていたのだ。みんなくでは、例年秋にアイヌの標本資料の保管と伝承を祈

る儀式「カムイノミ」をおこなっている。二〇〇七年からは北海道アイヌ協会に属する各地の団体を招聘して、カムイノミと併せて古式舞踊の演舞を一般公開している。このときは、カムイノミが主であるため、重要無形民俗文化財の保護団体として指定されているか否かは問っていない。

いっぽう、筆者は今年五月におこなわれた日本文化人類学研究会（国際人類学民族科学連合と同時開催）で、パンケットの余興としてアイヌの舞踊のアレンジを頼まれた。無形文化遺産に記載されている団体の方がより研究者たちに関心をもってもらえると考え、さらにステージ慣れしている「阿寒アイヌ工芸協同組合」に出演を依頼した。観覧した多くの方から「よかったです」と言っていたが、選択は間違っていないかと安堵した。しかし、アイヌの舞踊のどのような面を見てもらうのかを、つねに考え続けていた。

かつて、世界に認められていたカンボジアの胡椒。
一九七〇年代の内戦により、とどえてしまった生産をふたたびよみがえらせるため、
クラタペッパー社が選択したのは、有機農法とフェアトレードの実践であった。

カンボジアでの出会い

一九九二年にNGOの活動のボランティア隊員として初めてカンボジアを訪れた。現地での活動は、難民キャンプからの帰還民が新しい定住地が決まるまで滞在するレセプションセンター内での手伝いだった。「新しい土地に行っても産業はなく、これからの生活が不安だ」と口にしていただけがとても気になった。そんな彼らがどうすれば今後着実に農業に取り組めるだろうか、起業の発端はそこにあった。

一九九四年にNGOを辞めて、独自でカンボジアの農業の現状調査をはじめた。目的は、カンボジア農産物の対日輸出の可能性を探ることだった。そもそも日本には植物検疫や食品検疫があり、ほとんどの農産物はアジア諸国から輸入できない。消去法的に可能性を探ってみると、カンボジアから輸出できるものは、「ドリアン」と「ココナッツ」しか見つけれなかった。ただし両農産物とも輸送が難しい。そのとき偶然に、親戚の大叔父から一九六〇年代のカンボジアの農業統計資料を手に入れることができた。当時の政府資料は、一九七〇年代の内

年から二〇年ほど続いた内戦によって、世界から忘れ去られてしまった。
「世界一美味しい胡椒をもう一度世界に知ってもらえるようにしたい」との思いで、胡椒の仕事を始めることにした。

農家に安定した所得を

最初は、農家から買い取ってそれを日本のマーケットに営業して回った。しかし、表面菌数や含水率、質量、大きさ等の日本規格があるなか、カンボジア産胡椒は、どれも満たすことができなかった。結局、生産工程から管理しないと対日輸出は難しいという結果になり、買い付けではなく、自社農園をもとうということになった。そして産地調査をしていたときに出会った、苗を残していた農家にお願ひして、土地を借り、彼の息子に給料を払って胡椒を作ってもらうことになった。ツル性の胡椒が柱の一番上に到達するまで五年かかり、それから本収穫となる。そのあいだの費用はすべて自社の負担とし、生産農家に負担がかからないようにした。収穫が始まり、それまでの対日輸出のための営業を止めて、カンボジア国内の外国人にお土産として販売する方法に切り替えた。収穫されたものを、天日乾燥させ、黒い大粒の実だけを一粒ずつ手選別し、パッキングしたものを、最高級の胡椒として直営店で販売した。二〇〇三年は、胡椒の世界相場が暴落し、農家にとってはとても厳しい時期だったが、わたしたちの場合は、自社農園で栽培されたものを直接販売できるので、価格の下落に関係なく、農家に安定した所得を還元できた。

戦で焼きつくされていたので、これはとても貴重な資料だった。そこには、当時のカンボジアでの農産物について細かく産地や生産量がしるされていた。そしてカンボジアに胡椒の生産があったことを知った。

早速資料を元に、当時の胡椒の生産地を巡って見たが、やはり内戦時代の打撃が大きかったようで、ほとんど生産はされていなかった。そんななか「一九七九年に強制労働所から解放されて、農場に戻ってみると二、三本の胡椒の樹しか生き残っていなかったが、そこから少しずつ苗を増やしてきた」という胡椒農家と出会った。地域の苗が生き残っていたことは、幸運だったと思う。

カンボジアの胡椒の歴史を調べてみると、今から七〇〇年ほど前のアンコールワットの時代にカンボジアを訪れた中国人が特産品として胡椒を取り上げており、歴史はとても古いことが伺える。大航海時代にフランス人の手によってヨーロッパに広がり、カンボジア産の胡椒は世界一美味しいと評判になった。当時は胡椒一グラムと金一グラムが等価で取引されていたといわれている。それが一九七〇

オーガニック認証

カンボジアに先祖代々伝わる伝統的な農法で栽培をした胡椒は、まさにオーガニックであると自稱できるのだが、そうよぶためには他の団体による認証が必要だ。二〇〇六年、ドイツの支援により「カンボジアオーガニック農業協会(CORRA)」が設立され、わたしたちも会員として加盟した。二〇一一年、カンボジア初のオーガニック胡椒としての認証を得ることができた。現在、CORRAの副議長を務め、国際渉外を担っており、アジア地域オーガニック規格(AROS)の制定にも参加し、ASEAN諸国の他のオーガニック認証機関との連携も深めている。

胡椒のフェアトレード

胡椒には世界相場があり、ときに投機の対象となると価格が激しく変動する。さらに世界の主たる生産国による協会もあり、国家間で生産量や価格について毎年話し合われている。カンボジアのように協会に加盟していない国は、なかなか世界の状況を掌握できず、生産者は常に、相場に踊らされて所得が安定しない。

そこでわたしたちは、生産者と消費者を直接つなぎ、世界相場に惑わされることなく、安定した所得が生産者に得られるようにしている。さらに、緑胡椒のピクルスなど付加価値が付けられるような加工食品を開発することで所得の向上も目指している。今後も生産者の顔が見え、消費者の方々にも安心安全な商品の提供を続けて、地域社会にも貢献できる、フェアトレードを実践していきたいと思う。



着果して2か月程の生食用の胡椒



黒胡椒の天日干し



胡椒の若木と農園で働く人びと



脚立に乗って胡椒の収穫
(毎年2～3月ごろ)



首都プノンベンにあるクラタペッパー本店

味の根っこ



アラスカ先住民のクジラ料理

ミキガック

岸上 伸啓 民博 研究戦略センター



捕鯨祭ナルカタクでふるまわれたミキガック (2012年6月)

クジラを捕り、食べる人びと

アラスカやグリーンランドの先住民社会など世界各地には、今でもクジラを捕り、食べる民族が存在している。彼らにとって捕鯨は一〇〇年以上におよぶ伝統である。

しかし、一九七〇年代をひとつの契機として国際的な動物愛護団体や環境保護団体による反捕鯨運動が世界各地で大々的に繰り広げられ、欧米諸国や中南米諸国の各国政府は捕鯨に反対する立場をとるようになった。この結果、世界各地の捕鯨や鯨食文化は消滅の危機に瀕している。

アラスカのイヌピアット社会

アラスカの沿岸地域には、イヌピアットとよばれる先住民が住んでいる。彼らは、現在でもホッキョククジラ（以下、クジラ）を捕り、みんなでクジラをわかちあって食べている。

アラスカ最北端のバロー村に住むイヌピアットの人は、春と秋に沖合を季節移動するクジラを捕獲している。彼らの年間行事のなかでも大切な捕鯨祭と直接かかわる春の捕鯨はとくに重要である。

春の猟期は四月下旬から五月中旬である。村人は三〇余りの捕鯨集団にわかれて、クジラ猟に熱中する。ある集団が捕獲に成功すると、その集団のキャプテン宅で村人を招いて祝宴が開かれる。捕鯨に使用したウミアック（大型皮製ボート）の陸揚げの儀式アプガウティ、さらに6月下旬には捕鯨祭ナルカタクを開催する。

い。肉片や皮片の食感は柔らかく食べやすい。

家族に捕鯨者がいれば、具材を手に入れることができるので家庭でもミキガックを作ることができ、実際に食することはめったにない。そのため、キャプテンたちが村人にミキガックをふるまってくれるナルカタクなど村の祝宴は、それを食する貴重な機会である。村の老人たちはミキガックを皿に盛ってもらうと会場で食べるが、残った分はビニール袋などに入れて大切に持ち帰り、その味を自宅でも楽しんでいる。

民族の味

ミキガックはお金を出しても買うことはできない。



陸揚げの儀式アプガウティのようす (2009年6月)

捕鯨文化の将来
アラスカの捕鯨文化は今でも健在である。しかし、それを取り巻く状況は大きく変わっている。すでに述べたように反捕鯨運動がイヌピアットの捕鯨活動にも否定的な影響をおよぼしつつある。また、温暖化の影響により風向きや海水原の形成にこれまでになかった変化が生じている。さらに、温暖化の進展によってアラスカ近海での海底に眠る石油や天然ガスの開発活動の活発化、輸送海運路としての北西航路の開発など捕鯨活動に悪影響をおよぼしかねない事態も発生している。

彼らは、一〇年後も五〇年後もミキガックをみんなで楽しむことができるのだろうか。



ナルカタクのようす (2009年6月)

これらの機会にクジラの肉や脂皮、舌や内臓が村人にふるまわれるが、ミキガックとよばれる料理が必ずふるまわれる。ミキガックは、クジラの肉と脂肪付きの皮部、舌を混ぜ合わせて発酵させた料理である。数あるクジラ料理のなかでも特別な機会に必ず食べる民族料理のひとつである。この料理を作るには、約二週間、毎日二、三度、具材の入った容器をかき混ぜなくてはならない。

ミキガックの見た目はどす黒い色で、まったく美味しそうには見えない。その味は、日本人のわたしにとっては酸味と少しの苦みが混じり合った微妙な味である。においてはほとんどしな



製造中のミキガック (2009年5月)

ミキガック (約130人分)

用意するもの：容量およそ20リットルのバケツ

クジラの肉 約4.5キログラム

クジラの脂皮 30センチ×30センチ×2センチ

クジラの舌部 約1リットル分

- ① クジラの肉を幅5センチ、長さ13センチ、厚さ0.5センチの大きさにスライスする。
- ② 脂皮を一口サイズに切りわけ。
- ③ 舌部を一口サイズに切りわけ。
- ④ 切り分けられた肉と脂皮、舌をバケツに入れる。
- ⑤ バケツを直射日光が差し込まない、暗い倉庫などに置く。
- ⑥ 12日から14日間、毎日2、3度、バケツのなかをかき混ぜる。
- ⑦ 2週間後できあがり。冷やして食事に出すか冷凍保存する。

ファストフードに対抗して生まれたこのことばは、そもそも北イタリアのピエモンテ州ブラの町で一九八六年に立ち上げられたアソシエーション（共通の関心や目的にもとづいて複数の人が自発的につくる集団の形式）に端を発する。アルチゴラという食道楽のアソシエーションが誕生したこの年には、ふたつの大きな出来事があった。ひとつは地元ワイン製造会社「製造」するために添加したメタノールのせいで死者や失明者を何十人も出した事件であり、もうひとつが、翌月に起きたチェルノブイリ原子力発電所の事故である。

ピエモンテ産のワイン、バローロや地元料理タヤリンについて語り合うことが、食の問題にとどまらず、生産様式、社会関係、生態システム、エネルギーなどあらゆる問題と不可分であることをこのとき自覚したと創立者の一人カルロ・ペトリニは語っている。こうして食道楽の集まりにすぎなかったものが、スローフードという名の、食を通じた政治的・文化的運動へと成長していく。

文化人類学は、食べるのが社会的な行為であることを示してきた。だが今日では、食べることは、より政治的な行為になった。多国籍生化学企業の遺伝子組換え大豆を飼料とする牛の乳で作られた大量生産のチーズをユーロで買うのか、有機飼料で育てられた牛の乳から伝統的なやり方で作られたブラ・チーズをユーロで買うのか、消費者はその購買行動によってどのような生産者を支持するか日々投票し、自らの未

スローフード Slow Food

まつしま たけし
松嶋 健 日本学術振興会特別研究員／民博 外来研究員

人生を深く味わう

人間学の
キーワード

来を選択しているのである。政治の場が国会から日々の食卓、さらにはわたしたちの舌の上へと移ったことをスローフードははつきりと示したのであり、だからこそ消費者は「共生産者」とよばれるのだ。

それは必然的に、スローライフやスローシティのような、ライフスタイルや地域のあり方の見直しへとつながっていく。これはもはや人間だけの政治にとどまらない。文化的多様性を生物多様性と結びつけ、生態システムのなかに人間の社会システムを位置づけながら模索されているのは、微生物から人間まであらゆる生き物が参加する広義の政治なのである。

食はこのような政治へのあくまで入口にすぎないが、同時にもっとも身近で根源的な入口でもある。だからこそ「おいしい、きれいな、ただし」をモットーとするスローフードにとつて、おいしいものとおいしくないものを感じ分けられることは最重要事項となる。実際、赤ん坊のときから（母親も含めて）ちゃんとしたものを食べさせてみるとよい。子供は、驚くほどはつきりと違いがわかるようになるだろう。ものの味がわかるということが、人生の味わいがわかるということにつながる訳がない。食べ物でも人生でも、それがおいしくあるために必要なのは、新奇な刺激よりも、持続するなかでゆつくりと深まっていく奥行きのある味わいであろう。食についての専門大学さえ創設するにいたったスローフードのアソシエーション運動は、五感の教育とは五感の政治にほかならないということとを全世界に発信しているのである。

絵にさわる “体”で感じるGF絵画の魅力

ひろせ こうじろう 広瀬 浩二郎 民博 民族文化研究部

あらたな絵画の鑑賞法

七月二十八日、僕は東京・銀座のギャラリーで日本画家・間島秀徳氏の作品を触察した。これまで、僕が「絵にさわる」といえば、視覚障害者用にエンボス加工、立体コピーされた絵画しか思いつかなかった。

しかし、今回は作家の了承のもと、絵そのものに直接「さわる」のである！ ギャラリーには五〇名ほどの観客が集まった。「触察による批評／制作の可能性を探る」というイベントのテーマは、万人の好奇心に訴える意外性があるようだ。僕には触察パフォーマンスをしようという意図はなかったが、この日はヘレン・ケラーのTシャツを身に付け、気合を入れて絵に対峙した。彼女の事績にあやかって「触察者」の心意気を示したつもりである。以下では、当日のインタビュー記録から一部を抜粋し、僕の「触感」をお伝えしよう。

初めに、両手を広げて動きながらさわっていきましました。手のひらにごっこつした凹凸があったり、例えるなら日本神話の国造りのように、神様がかき混ぜたものがぼたぼたと落ち、海底から陸地がぼこぼここと生まれている躍動



触察鑑賞の歴史的(?)現場。銀座のギャラリーで全身を使って絵画と対話する筆者。撮影・堀江武史

を感じました。次に、指先を使って小さく細かくさわりました。すると、大きくザーツとさわったときには平らだと思っていた『海』の部分も、じつはけっこう凹凸や流れがあることがわかりました。最初はごっこつとして痛い

なあと感じたところも、次第に手のひらになじむような気がしたりと、印象が変化していったのがおもしろかったですね。

さわりたいくなる絵を求めて

間島さんは石や砂などの自然素材を大量の水で流し固める独自の技法を用いて、絵画を制作している。制作過程では、触覚的な表現も意識しておられるという。僕の触察による鑑賞は、「身体で描く」彼の制作スタイルを追体験する行為だったといえる。間島作品のように、世の中には目が見える人も「さわりたいくなる」絵が多数存在する。「さわりたい」とは「目に見えない世界を身体で探る手法」だとすれば、「さわる」ことで、より深く理解できる絵画があるに違いない。人類の「知」の枠組みを揺さぶる力を内包する絵、万人が「さわりたいくなる」作品を僕はGF (Global Friendship) 絵画とよんでいる。GF絵画を発掘し、「絵にさわる」あらたな鑑賞法に賛同する人を増やす取り組みを広げていきたい。



白くなくても「白衣」

おたが 大谷 かがり 中部大学助教

天使といえば、西洋絵画ではだいたい翼がある男の赤ん坊。なのに「白衣の天使」といえば若い看護婦とどういうわけか相場が決まっていた。男女ひっくり返るめて看護婦とよぶのがふつうになってきたが、「白衣の天使」では、ことばのニュアンス的に患者が気易く接しにくそうだ。



ピンクの白衣

廃止されたナースキャップ

看護師の白衣はさまざまな消費のされ方をしている。当人たちにとっては、速乾性と伸縮性に優れた機能的な作業着、看護のプロであることを自覚させる記号。見る者にとっては、優しい、あるいはそうあってほしい白衣の天使、ときに女性のシンボルとしてフェティシズムの欲望がかき立てられるがため、コスプレでは横綱格。

看護師は白衣とナースキャップを着用していたが、ナースキャップは頻繁に洗濯できず不潔で、仕事の邪魔になるなどの理由で、日本では多くの病院で廃止になったのではないかと思う。しかしながら、今でもネット上では、ナースキャップをかぶった看護師のイラストが容易に検索できるし、先日夜中にテレビを眺めていたら、看護師という設定の女の子

ので「板のようだった」と表現する大先輩もいたほどだ！、ばりばりばりばりと音を立ててのりをはがしながら袖を通したのだそうだ。木綿の白衣は何十年と洗濯され続けていくと生地が摩耗し、縮んで薄くなつていく。大先輩のは往々にして透け感のあるミニスカートとなり、なかなかセクシーであったと記憶している。

わたしが就職して二年目から、勤めていた病院では、白衣のデザインがスカートタイプとパンツタイプ、レギュラータイプの襟と丸襟が選べるようになった。素材も速乾性と伸縮性に優れたものに変わった。わたしは、患者さんをベッドから車いすへ移動させるときに、スカートでは動きにくかったことから、パンツタイプを好んで着用した。

現在は、デザイン、生地、ブランドもさまざまな白衣が市販されている。日本でも人気があり、テレビ放映されていたアメリカのドラマ「ER 救急救命室」の登場人物が着ていたスクラブ(半そでのVネックTシャツ)

がナースキャップをかぶってミニスカートをはいていた。世間では今でもナースキャップをかぶっているイメージが強いらしい。

「板のようだった」白衣

最近ではピンクや水色、紫など、カラーバリエーションも豊富であるが、いまでも「白衣」とよぶ。ナースキャップが廃止になり、白衣のデザインやスタイルに幅をもたせやすくなった。

わたしは一九九〇年代に市民病院に就職したとき、木綿の白い白衣を着た。病院の地下一階に洗濯室があり、職員の白衣はそこで一斉に洗濯されていた。戻ってくるときにはきちんとアイロンが当てられていた。当時先輩に聞いた話では、以前はとても硬くのりづけされて戻ってきたツツを着用している看護師も見受けられる。病院は各施設の特徴や雰囲気に合わせて戦略的に白衣を選ぶようである。

プロフェッショナルにかわる装置

白衣を着ると、看護師はスイッチが入る。わたしの場合は、病院の地下一階に降り更衣室で白衣に着替えるとき看護師の自分に切り替わった。エレベーターに乗り込み、職場がある病棟七階でドアが開いたとき、プロフェッショナルとしての気持ちが一〇〇パーセントとなる。たとえば、目の前で食道静脈瘤を患う人が大量に吐血をし、あつという間に意識を失ったとしても、すぐさまバイタルサインを測定し、声をかけて励まし、仲間に応援を頼み、医師を呼ぶことができるだろう。白衣とは、どのような状況のなかでも看護師として行動させる装置なのだ。



看護学生だったわたし。戴帽式の朝。初めてかぶるナースキャップに胸が躍った。左から2番目、机にもたれかかっているのが筆者



白い白衣(パンツ)



白い白衣(スカート)



スクラブ

編集後記

20年ほど前のこと、身内がインドに住んでいてデング熱にかかったことがある。それまでは聞いたことがなかった病気で、てんぐねつ？なんで天狗？などと不思議に思った記憶がある。遠い、暑い国の病気と思っていたのに、今年の夏、首都東京の公園で蚊に刺された人びとが感染した。9月も過ぎようというのに、いまだにあらたな感染者が見つかるらしい。この特集の企画をたてて原稿依頼をした段階では、まだエボラもデング熱も話題にはなっていなかった。疫病との戦いの最前線で奮闘しておられる伊藤さんや西浦さんには、ご多忙のところ協力いただき感謝している。

このお二人のお話のあるシンポジウムで聞く機会があった。それまでは、ウイルスといえば生命体にとっての脅威、生来の悪者というイメージしかなかったが、大半のウイルスは宿主と共生関係を保ちつつ、ともに仲良く進化してきているらしい。種の保存になくてもならないウイルスもいるのに、ちょっと間違っただけで感染してしまうドジな奴らのせいで、「悪」のレッテルをはられているウイルスに憐れみを感じるようになった。

(山中由里子)

●表紙：疫病よけの護符として用いられた版画
地域：ネパール 民族：チベット
標本番号 H0079124

次号の予告

特集

おもちゃ いまむかし

※みんぱくウィークエンド・サロンの情報は、13ページに移りました。

みんぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893/平日9:00~17:00)

月刊みんぱく 2014年11月号

第38巻第11号通巻第446号 2014年11月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信
編集委員 山中由里子(編集長) 櫻永真佐夫 河合洋尚
庄司博史 菅瀬晶子 丹羽典生 丸川雄三

編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一孝 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

